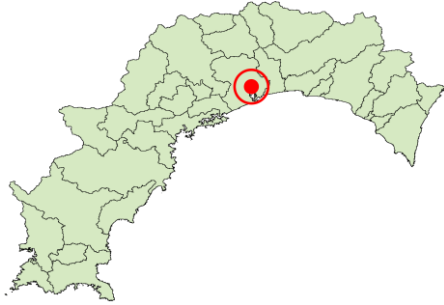




鏡川について

鏡川は、高知県高知市の土佐山（高尻木山）を源流とし、高知市市街地を貫流したのち、浦戸湾に注ぐ、河川延長 30.5km の二級河川である。

川は、古くから高知市民の飲み水として利用されてきた。また、市街地を流れる都市河川でありながら、アユをはじめとする多様な生物が生息しており、多くの子どもや釣人で賑わう空間にもなっている。



鏡川の現状

恵み豊かな鏡川は、一方で幾多の水害を引き起こしてきた。こうした災害への対策、また農業や工業における利水の拡大から、近年、下流域を中心に護岸のコンクリート化や堰等の横断工作物の設置が進められた。また、最近の異常気象による豪雨災害等の頻発化や上流域の少子高齢化による山林の荒廃により、河川環境は大きく変化した。

現在、鏡川の下流域では、①横断工作物によるアユ等回遊魚の移動阻害、②流量の減少、③上流からの砂利供給不足、④河床への土砂堆積、⑤河床の固定化（沈み石化）が進行し、常態化している。また、これらの影響で、下流域の瀬・淵の構造が失われ、魚介類や水生昆虫等の底生生物の生息に悪影響を及ぼしており、その修復が求められる。

また、護岸のコンクリート化等によって川の親水性が失われ、人と川のつながりが徐々に薄れている。特に、子どもたちにおいて、川や生き物と触れあう機会が大きく減少していることから、これらやその親世代に鏡川の魅力を伝え、その大切さについて理解を深める必要がある。



組織の設立と活動の目的・方針

上記課題の中、長年、鏡川の保全に取り組んできた漁業者・漁協が主体となり、「鏡川環境保全の会」を平成 25 年度に設立。体制は、漁業者・漁協だけでなく、地域住民、釣り団体、小学校 PTA、青少年育成協議会、大学等で構成。活動目的は、河川環境の劣化が著しい下流域の環境修復と、子どもたちの河川環境や生き物に対する興味喚起である。

活動組織



○ 下流域における河川環境の修復

瀬淵の構造が失われ、河床への土砂の堆積や沈み石化が常態化している下流域において、定期的に環境整備（堆積土砂の整備）を行い、魚介類の産卵や水生昆虫等の底生生物（餌生物）の生息場として重要な河床環境の修復を図る。

○ 教育・学習活動

体験学習を実施し、次世代を担う子どもたちやその保護者に川の魅力やそこで育まれる生き物の豊かさを伝え、その保全への理解を深める。

河川環境を修復し、川の魅力を伝え、次世代に引き継ぐ

(1) 下流域における河川環境の修復

下流域で課題となっている河床環境（土砂の堆積や沈み石化の常態化）の修復を目的に、堆積土砂整備を定期的に行っている。

活動は、近自然工法の川づくりに向けた市内の民間研究所に、毎年整備計画の立案や事後評価をしてもらいながら、適正に進めている。

整備は、①重機（バックホー）を利用して河床の小砂利化・浮石化を図る取組と、②人力で河床を耕うんし、浮石の割合を増加させる取組で行う。活動時期は、降水量や台風の襲来が低下する 10 月中頃としている。



(2) 教育・学習活動「川の生き物探検隊」の開催

市民の鏡川に対する関心や思いを高めるために、「川の生き物探検隊」を開催している。開催時期は、夏休みもしくは 9 月の連休。対象は、市内の小学生および保護者。定員制（15 組 30 名程度）で、募集は応募用チラシを作成・印刷し、それを小学校に送り配布してもらう。

プログラムは、座学、体験、試食、ふりかえりの流れで行う。座学は、鏡川を研究フィールドとする大学や食文化研究者など、毎年講師を招いて実施。体験は、決められたエリア内で安全に魚介類を探ったり、観察してもらったりする。試食は、鏡川で育ったアユの塩焼き。ふりかえりでは、アンケートを実施する。



活動の効果と今後の方針

河床環境の修復に係る事後評価として調査しているアユ親魚の生息密度は、各年度、整備場所でも明らかに高く、活動の効果がうかがえる。また、浮石を好む希少種カマキリなど底生魚が整備場所で確認され、これらが餌とする底生生物も健全に育まれていると評価できる。一方、川の生き物探検隊も好評で、毎年定員以上の応募があり、抽選によって参加者を決めるほどである。

今後も、当取組を継続し、①健全な河川環境の維持、②鏡川保全に対する子どもたち等の理解を深めたい。また、下流の堰魚道の機能不全にかかる改修、流量不足による魚介類の移動阻害に係る堰やダム弾力的運用、カワシオグサの異常繁茂への対策など関係機関と協議を進めるとともに、これらに対する市民・県民の理解の深化を図ってきたい。

アユ生息密度（尾/m²）

